21 日 3 時　フィールドワーク

長崎、大分、福岡、山口、愛媛、笠岡それぞれの守る会の支部から 40 人以上の参加となりました。　カブトガニ博物館の駐車場に集合した後、毎年放流する場所に、育ったカブトガニを見つけに行きました。子どもたちが放流するニュースをいつも見ていましたが、その成果がなかなか見えないことを知っていた私は、本当にこの目で見られるのかと疑問に思いながらみんなの後をついていきました。

会員の浅野先生が案内してくださり、説明を受けました。カブトガニは、砂地に近いだべの上を這っているといわれました。大きくなるほど砂地から遠いところにいるとのことでした。

私は目を凝らしてだべをにらみましたが、なかなかそれらしきものを見つけることができません。あちこちで、見慣れた研究員のかた、参加者の中から「あそこにいるよ」「ここにも」という声が聞こえてきます。

私には、巻貝がのろのろゆらゆら這って行く姿や、小さいカニがちょろちょろと動く姿が目に付いて仕方がありません。

カブトガニの幼生は、泥だらけになって姿を隠していますから、小さくこんもり盛り上がったところを見つけなければなりません。じっと見ているとそのこんもりが動くのです。そっと手にとって水溜りで洗うと、その姿がくっきり現れます。

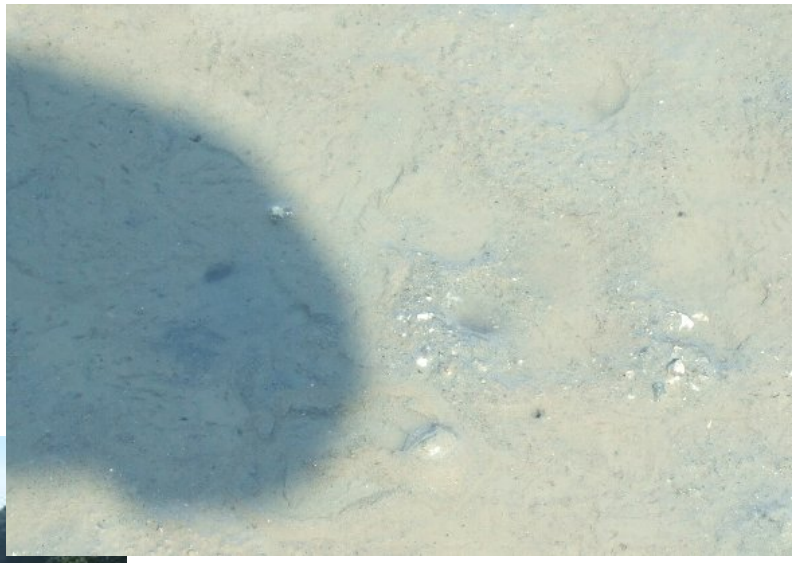
参加者の方に教えてもらって手にしたカブトガニは確かに生きていました。泥の上で動いていました。尻尾が動いています。こんな感動は久しぶりです。いつも生きて頑張る人たちを見ているのに、手のひらの命がとても大切に思えました。それにとても可愛いのです。

子どもたちも見つけました。四国は愛媛県西条市からの参加の子どもたちです。手に取ると、大きさを測ります。

図るところは、「殻を横に」。尾の長短は固体によって違うらしいので、頭から尾の先までを測らないのだそうです。

彼女たちは、西条市で、放流活動を続けながら、産卵後のカブトガニの幼生たちを岸から 100 メートルのところに発見したということで、もうベテランだし、そんなに広い干潟で見つけることは至難の業だといえます。尊敬してしまいますね。その後の研究会でも静岡大学の伊藤教授に励まされ、大きな評価を受けていました。

私もついに発見。写真を撮っている腕が影に鳴っていますが、ひじの影の右にこんもり盛り上がっています。感動の出来事でした



こうして一時間ばかり海岸をみんなで歩いて長年の成果を確認しあいました。

参加者の 1 人が「7 年ぶりにきましたが、あのときよりも浜の状態は良いようです。」といわれました。

関係者の努力が、海水の浄化につながっていると感じました。